島津藩政時代の茶の歴史(Ⅲ)

静岡県茶生産農業協同組合連合会 足立 東平

The History of Tea in SHIMAZU Era (Part 3)

By Tôhei ADACHI

6 茶に関して古くから世に伝わる
物件(補遺)

6.1 茶碗

(1) 由緒ある茶碗

(a) 忠良公(日新公)御使用のお茶碗

大浦(川辺郡笠沙町)の吉見敦男氏が所蔵されているもの。牡丹に唐草がえがかれた煎茶茶碗で、その形や模様などからすると、渡来品のように思われる。(本誌 No. 8, p. 122, 写真14参照)。吉見氏の宅には、今でも庭前に日新公のほこらが設けられているが、その昔、日新公のお宿をつとめた家からである由。

(b) 義弘公御使用の金の茶碗

既報(本誌 No. 8, p. 122 参照)。

(c) 桃園天皇御下賜の茗碗

池田貞記は茶一壺を桃園天皇に献上して えい慮をこうむり、菊花御紋章付き茗碗、その他色紙、たんざくなどを賜わった。(本誌 No. 8, p. 118, 119 参照) この茗碗は貞記の6世にあたる都城市池田芳男氏(神戸市在住)の所有となっており、現物は宮崎市神武宮庭徴古館に陳列されている(延岡市四倉富城氏のたよりによる)。

写真15 桃園天皇御下賜の茗碗
(都城市 池田芳男氏蔵)

(d) 高麗茶碗

慶長年間(1596~)沈家の祖先が、朝鮮から帰化せられたおり、たずさえてきた得がたい宝器、いまも沈寿官氏が秘蔵されている。この茶碗は一説には、火計茶碗ひはかり(後出)とも言われている。沈寿官は帰化以来代々襲名

して、苗代川焼き(鹿児島県日置郡伊集院町)のかまを今日まで連綿と続けてきている。

写真16 高麗茶碗
(鹿児島県伊集院町 沈寿官氏蔵)

(2) 藩主お手作りの茶碗

(a) 義弘公お手作り茶碗

義弘公お手作り茶碗は非常に珍しく、かつまたたいへんに貴重である。写真17は義弘公お手作りと伝えられる茶碗で、黒みがかったかっ色のまことに渋味のあるはだ色、茶碗の裏底に「慶長八 義弘作之」の刻銘がはいっている。

写真17 義弘公お手作り茶碗
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

(b) 斉彬公お手作り茶碗

斉彬公お手作りのまっ茶茶碗のうちで、特に興味をそそるのは、嘉永巳酉11月11日、河村某に拝領仰せ付けら

れた旨箱書きされた、斉彬公お手作りの筒茶碗“ボンベン”である(写真18)。公は写真にみるように、白砲の形に模して茶碗を作り、これに、

炉にかまに 道具そろえて こと国の

ふねをみじんに うてやボンベン

という和歌を焼きだして、近親や家臣に配与せられたという。当時白砲のことを“ボンベン”と称えられていた。幕末の風雲急であったことが、身近に感じさせられる。

写真18 斉彬公お手作りの筒茶碗“ボンベン”

直径 10.9 cm, 高さ 14.2 cm

(鹿児島市 尚古集成館陳列)

(c) 忠義公お手作りの茶碗

写真19 はお庭焼きの1種で、土の種類やはだ色などからすると、しろと目には長太郎焼きによく似かよって見える。向かって左は青みがかった濃いグレーで、強いつやがある。右は赤みがかったチョコレート色で、つやのない渋いはだ色。二つとも茶碗の裏底に、桜の花の刻印がおされている(桜の刻印は島津藩お庭焼きのしるし)。

写真19, 20 は忠義公お手作りの茶碗。

写真19 忠義公お手作りの茶碗(その1)

向って左 口径 9.7 cm, 高さ 6.4 cm

向って右 口径 9.7 cm, 高さ 6.7 cm

(鹿児島市 尚古集成館陳列)

写真20 忠義公お手作りの茶碗(その2)

赤楽茶碗

口径 11.3 cm, 高さ 7.0 cm

(鹿児島市 尚古集成館陳列)

(3) 御判手茶碗

慶長6年(1601)関ガ原の役の問題が落ち着し、島津家の領土が一応あんどすると、義弘公は関ガ原の役の責任をとり帖佐に隠居して、国務は家久に譲った。そして市来に上陸した金海(朝鮮からつれてきた)を帖佐に呼んで、宇都にかまを開かせ、また芳忠に命じて八日町に開窯させた。それから7年後の慶長13年(1608)義弘公は加治木に居を移したが、同時に宇都・八日町のかまを廃して金海・芳忠も同地に呼んだ。金海は義弘公居城の北隣りに、芳忠は竜口坂に、それぞれかまを構えた。義弘公は帖佐・加治木で、またときおり苗代川にもおもむいて、好みの茶器を作らせ、ロクロ仕上げをすませたばかりの茶器に、みずから「義」の字を刻し、不できのものは捨てさせて、気に入ったものばかりを残した。これは当時御判手⁶¹⁾といって、非常に珍重された。

「加治木古老物語」によると、

帖佐御判手御茶碗、先年、郷原転殿、御拜見被成候而、此茶碗今にしても被下候はば、指一つ二つ切候共、ほしき由、御吐為被成申候。

とある。珍重のほどが察せられる。

義弘公の御判手には、以上のほかに、韓・萬などの文字を刻せしめ、または印形を入れられ、あるいはみずからぼ印をおされたものなどがある。⁶¹⁾

御判手茶碗は義弘公以来、後代の藩主の代にもみられる。

(a) 義弘公御判手茶碗

写真21 はうすい卵色の無地、茶碗の内外にヒビレのはいたように見えるのは、金をはめ込んだもので、傷ではない。

写真22 も義弘公の御判手であるが、これには刻印はなく、義弘公のぼ印がおされている。その指形が途方もなく大きいのが目立っている。

義弘公の御判手茶碗で、阿久根市(鹿児島県)の田野

写真21 義弘公御判手茶碗(その1)
向かって左 口径 12 cm, 高さ 9.2 cm
向かって右 口径 13.5 cm, 高さ 7.3 cm
(鹿児島市 尚古集成館陳列)

写真23 斉彬公御判手
牡丹花形茶碗
口径 12 cm, 高さ 8 cm
(鹿児島市 尚古集成館陳列)

写真22 義弘公御判手茶碗(その2)
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

さん所蔵のものは、そのできが非常によく、御判手茶碗のうちの逸品と言われている、それには御判手を証明する、次のような古文書がついている。

義弘公陽明殿勤任の間命に依り印刻之を識す。

右萬字明らかなり。

近習 水竹主馬

(b) 斉彬公御判手茶碗

写真23は牡丹花形茶碗、箱書に内白葉・外紫葉とあるが、内縁の白に対する外回りのうす紫は対照もよいし、はなはだ優雅な感じを与えている。斉彬公の御判手には、このほか黒染茶碗、金溜茶碗、お庭焼き茶碗、平染茶碗など、ここに書き尽くせないほど、さまざまなしかも貴重なまっ茶茶碗が、今日尚古集成館(島津家)に保存されている。

(c) 忠義公御判手茶碗

写真24は荷葉御茶碗、千葉蝶絵付と箱書きされた忠義公の御判手茶碗である。

(4) 薩摩焼茶碗のいろいろ

義弘公以来の薩摩焼きのなかには、茶人の間に珍重さ

写真24 忠義公御判手
荷葉茶碗
千葉蝶絵付
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

れた名器が、少なからず残り伝えられている。

これらの名器は多くの場合、有名茶人と名工とが、同時に出了たときに作られたものといわれる。しかし、なんとしても当時の陶工は藩の手厚い保護を受け、その作はいわゆる“殿様仕事”であり、“ソロバン仕事”でなかったことから、天下の名器が生み出された、ということもできるであろう。

以下藩政時代の作と伝えられる代表的なまっ茶茶碗を、おおむねかまの別に、ここに掲げてみることにする。

(a) 火計茶碗

薩摩焼きは当初朝鮮渡来の陶土・釉(上薬)を原料として作られた。慶長の役の帰りに、バラスとして船底にたくさんの陶土・上薬を積荷して、持ち帰ったものを使っていた。これを“火計”と称した。火だけが日本産で、あとはみな朝鮮渡来のものという意味である。

写真25は純白に近く、白薩摩の祖型をなすものである。火計は南方型にはじまったもので、形の上からはな

写真25 火計茶碗(その1)
白色火計茶碗、慶長年間帖佐の宇都のかま
で、金海が焼いたもの。
口径 14 cm, 高さ 10 cm
(鹿児島県加治木町 曾木隆輝氏蔵)

写真26 火計茶碗(その2)
黒色火計茶碗、慶長年間帖佐の八日町のか
まで芳忠が焼いたもの。
口径 10 cm, 高さ 9 cm
(鹿児島県加治木町 曾木隆輝氏蔵)

にかしら大陸的な感じを受ける。“火計”は茶碗だけに
限られたものではなく、茶壺などにもみられる。

(b) 白 薩 摩

島津藩では、朝鮮渡来の白色陶土が減少すると、苗代
川初代の庄屋、朴平意に案内役をつけて、領内各地を調
べさせ、慶長19年(1614)藩内各地に陶土を発見した。
そして、これは揖宿郡山川村^{なつかわ}にあるものが、特に良
質であることがわかった。また灰にして上薬に混ぜるナ
ラの木も、良質のものが、東南方鹿籠村^{ひがしみなみかたかこ}(現在の枕崎
市)にあることがわかった。そこでそれらを原料とし
て、加治木の御里がまで試陶したところ、純白の茶碗が
できた。義弘公は名器の産地で名高い朝鮮の熊川のもの
に、非常によく似ていると称賛された。しかし、鹿児島
および苗代川の白薩摩^{61.65)}は民間の使用を許さず、すべて藩
用にのみ使われた。

もともと、古い時代の薩摩焼きには模様ではなく、
白一色であった。それが慶安の初めのころ(1648〜)か

ら、上絵付けがはじめられたという。写真27は白薩摩で
ある。まん中のもも、両側のもも白の無地で、その
形からはまことにふくよかな、大陸的な感じを受ける。
両側の二つは托鉢用^{たくはつ}の鉢によく似ているが、古い時代の
朝鮮には、日常の食器のうちにこのような形のものがみ
られるという。食器から変わったかどうかはわからない
が、新しい時代の焼きには、この平茶碗のような形のも
のはみられないようである。

写真27 白 薩 摩
高さは向かって左から 5.5 cm, 6.4 cm, 5.5 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

(c) 苗 代 川 焼 き

写真28は義久公(島津第16代)の御使用になったもの
と伝えられる御飯屋茶碗^{おがや}。外見は漆黒で“ぬりもの”の
ように強い光沢がある。薩摩黒焼きの代表的なものとい
われる。苗代川のかまからでた、苗代川焼きとその道の
人は言う。

写真28 苗 代 川 焼 き
御 飯 屋 茶 碗
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

(d) 堅 野 焼 き

義弘公が薨ぜられると、鹿児島館の家久公は、金海を
加治木から呼んで、元和6年(1620)冷水町堅野^{やかた}にかま
を開かせたが、翌年金海が死んだので、嫡子金和がその
あとを継いだ。金和は家久公の命を受けて、前後2回肥

後におもむき、鍋島藩の御用がま(有田)で研究し、青磁、染付白磁を会得して帰った。この堅野がまは島津藩の御用がまとして、明治維新に至るまで連綿として続き薩摩焼きの中樞をなした。写真29は堅野焼き茶碗、向かって左は“紫べつ甲”，右は“なまこぐすり”。いずれも堅野御用がまからでたものであるという。

写真29 堅野焼き
左は紫べつ甲，右はなまこぐすり
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

(e) 錦手

白薩摩の雄とされる錦手は、光久公の慶安年間(1648～)，有村久兵衛という者が京都に留学して、仁清から伝授を受け、堅野で製作を始めたものである。

当時錦手は他のかまでは製作することを許されず、苗代川でも製作を許されたのは、それから約200年後の天保11年(1840)であった。

写真30の錦手茶碗は、お庭焼きの一つであるが、京都五条の陶工で、代々錦光山と称し禁中の調度を製作した青木宗兵衛の作と伝えられる。

写真30 錦手茶碗
錦光山作
(鹿児島市 中尾健次氏蔵)

(f) 竜門司焼き

竜門司焼き(加治木)は、鮮人山本碗右衛門が、鹿児島^{61.67)}の堅野で陶法を学び、のちいまの加治木小山田・茶碗

屋付近に良土を発見して、元禄初年(1688～)製陶を始めたのが起こりで、その跡を当時小山田村・西別府・竹子村三村の庄屋をつとめていた川原十左衛門が、門弟となって継いだ。十左衛門は芳工と称した。かれは肥前・筑前・筑後・京都・尾張・伊勢などに歴遊して陶法を学び、いわゆる鮫肌^{さめはだ}焼きなるものを創始した。また竜門司^{たまたながしゅう}焼きは“黒もの”のほか、三彩の玉流釉^{たまながしゅう}の技法を使った“黒もの”も作り、陶器に明かるい色調を持たせている。いまの竜門司焼きは、この子孫が続けて現在に及んでいる民がまである。

写真31にみる8個の茶碗は、元禄創業から幕末ころまでの作といわれる竜門司焼きである。姿や色彩などには、いつみても、いつまでみても、飽くことを知らぬと言われるほど、時代的渋味があり、同時にまた、近代的清新ささえ感じられる。いずれも竜門司焼きの代表的なもの。竜門司焼きの流れをくむ指折りの陶工たちでさえ、今日この色彩を出そうとして、苦心を続けているほどの逸品である。

写真31 竜門司焼き茶碗
(鹿児島市 美術館陳列)

(g) 帖佐焼き

帖佐のかまは、慶長13年(1608)義弘公が加治木に移管と同時に廃窯となったが、それから約60年後の寛文5年(1665)に、同町西餅田の験者小野元立^{おのりゅう}が、民間の力で開窯に成功し、盛んに日用雑器を製造した。写真32、33、34は古帖佐。

写真34古帖佐焼き(その3)は、帖佐焼きを再興した小野元立^{おのりゅう}院によって作り出された元立院焼き。この焼きはどんこ^{どんこ}焼き、蛇蛻^{じゃかつ}または松皮肌^{まつかわはだ}ともいう。“どんこ”は薩摩ことばで、俗にいう“ひきがえる”のこと。はだがひきがえるに似ているところから、この名が出たもの。しかし茶器の場合は“どんこ”とはいわないで、普通は“松皮肌”と呼ばれている。

(h) 馬上盃

馬上で茶を飲むのにもちいられたところから、この名が出たものだという。出陣のときには、茶碗をくらしい

写真32 古帖佐焼き(その1)
口径 11.5 cm, 高さ 9 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

写真33 古帖佐焼き(その2)
鮫肌焼き(大ざめ)
口径 11.4 cm, 高さ 10.3 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

写真34 古帖佐(その3)
元立院焼き茶碗(松皮肌茶碗)
口径 10.9 cm, 高さ 9.5 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

わえつけて出て行ったものといわれ、いとぞこにひもを通す穴のあけてあるのもおもしろい。

6.2 水指

(1) 仁清作の水指

仁清は名を清兵衛といい、山城の仁和寺で陶器を焼い

写真35 帖佐焼き
白釉蓮葉花形茶盃(江戸時代の作)
(東京博物館陳列)

写真36 馬上盃
(鹿児島市 美術館陳列)

写真37 仁清の水指
口径 3.8 cm, 高さ 13.6 cm
(鹿児島市 尚古集成館陳列)

た。そのゆかりから仁清と名のった。仁清は錦絵にすぐれたが、その作は今日わが国には、多く現存しないと言われる。

写真37の水指は、うすい灰色の地に、“つたかずら”が墨絵で描かれている清素なものであるが、その姿といい絵といい、寸分の隙がない。裏底に仁清の刻印が打ってある。ふたは木製で黒の漆塗り、菊ときりの紋章つきになっているが、おそらく高貴の使用になったものであらうと思われる。

(2) お庭焼きの大水指

お庭焼きの大水指、獅子に牡丹の図、木村探元の絵付け（鹿児島市、山口宗恵氏蔵）（本誌 No. 8, p. 115 参照）。

6.3 茶 杓

(1) 斉彬公お手作りの茶杓

斉彬公お手作りで、お茶道役村上寿庵の拝領した茶杓が、尚古集成館に保存されている（写真38）。

茶杓は1本で、これに竹筒の容器がついている。竹筒には仙巖竹と書かれてあるだけで、まことに素朴なものであるが、このなんのかざり気のないところに、かえって茶道の本義が存するかのように思えるし、またこれをお手作りにされたことによって、斉彬公のお人柄の一端がうかがえるかのようにも感じられる。

写真38 彬公お手作りの茶杓
茶杓の長さ 約 2.1 cm
（鹿児島市 尚古集成館陳列）

写真39 茶入れ（その1）古帖佐焼き茶入れ

	向って左	中	左
口 径	1.0 cm	1.3 cm	1.3 cm
直 径	4.5 cm	5.4 cm	5.4 cm
高 さ	10.5 cm	10.0 cm	10.5 cm

（鹿児島県加治木町 新納教義氏蔵）

6.4 茶 入 れ

(1) 茶入れ（その1）古帖佐焼き茶入れ

写真39は加治木町於里（鹿児島県）にかまを設け、義

弘公の命により焼かれた古帖佐焼き 茶入れ、3個のうち左端は作者不明、中は芳仲、右端は金海の作、素朴で豪快な薩摩人の気風によく合っており、渋い色合いに特色があるという。

(2) 茶入れ（その2）

写真40 はいろいろの形の茶入れである。右から2番目は芳工作の銘がはいっているが、その他のものは竜門司焼きか、古帖佐焼きか明らかにされていない。ともかく、茶人には目に入れてもいたくないほどのものであるらしい。いちばん左端のものには、木製のふたがついている。色合いは黒かっ色で、渋味のある無地、小さい割合に重く、すわりもよい。

写真40 茶入れ（その2）

高さ左から 3.3 cm, 4.5 cm, 6.7 cm, 8.2 cm
10.3 cm
（鹿児島市 美術館陳列）

6.5 茶 壺 の 類

茶壺といえば徳川時代、將軍家に納めるお茶は茶壺に入れて、京都から江戸まで運ばれたもので、それはお茶壺道中とよばれば、大名行列と同じに、丁寧な扱いがされてきたものである。子守歌にある「茶壺に追われてトッピンシャン……」というのは、そのころのお茶壺道中の威勢を伝える名ごりということもできよう。

ともかく、茶の貯蔵に金物が使われるようになった以前はもちろん、その後も金物は非常に貴重であったために、少なくとも明治の末期ころまでは、焼物の茶壺の類が広く実用に供せられてきたもののようである。

しかし、すき者の間にもちいられた茶壺は格別なもので、ことに「口切り茶の湯」などという茶の湯の儀式には、諸大名のみえも手伝って、飛び切りぜいを尽した壺が求められたらしく、それにはめっぽう金をかけてきたもののようである。

茶壺に関する記録はあまり多くはないが、日本茶業史に次のような一節がでていいる。それによると『茶を蔵して香気を保たしめんと欲せば、先ず茶壺の良否を覗き見るべからず。茶壺は呂宋の産を以て最とせるも、茶道の興隆に従って遂にその欠乏を告ぐるに至り、秀吉乃ち堺

の人納屋助左衛門をして、呂宋に茶壺五十個を購わしめ、利休に命じてその良否を判ぜしめ、之を諸公に分興す。』となっている。

ついでに久生十蘭^{ひさおじゅうらん}（先年物故された。）が、“呂宋の壺”をオール読物⁷⁰に書いている。これは小説であって、内容についてはもちろん真偽のほどは知る由もないが、戦国の世の茶壺というものに、どのようにぜいを尽されたかがうかがえて興味深いものがある。

(1) 茶壺（その1）太平楽壺

この壺は義弘公当時の帰化人（朝鮮人）金海が、大隅国帖佐（始良郡）で焼いた大型茶壺（古帖佐）で、薩摩^{はつ}焼きの初がま品である。原料陶土は朝鮮から輸入した火

写真41 茶壺（その1）太平楽壺
（鹿児島市 尚古集成館陳列）

写真42 茶壺（その2）帖佐焼き茶壺（古帖佐）
高さ 32.5 cm
（鹿児島市 上野幸枝氏蔵）

計と伝えられている。（尚古集成館説明書による。）

(2) 茶壺（その2）帖佐焼茶壺

つくりは薄手ではなはだ軽く、まことに上品な姿をしている。色は漆黒で強い光沢をもっている。古帖佐といわれる。

(3) 茶壺（その3）竜門司焼き茶壺

腰高の壺、肩の張りからすそのしぼり具合、ふくよかでかざり気のないこの姿からは、まことに清素な感じをうける。竜門司二代の陶工、芳工作の銘入りできわめて貴重なものである。

写真43 茶壺（その3）竜門司焼き茶壺
竜門司焼き、鮫肌（芳工作）
口径 14 cm, 胴径 34 cm
（鹿児島市 美術館陳列）

写真44 茶壺（その4）
高さ 35.3 cm
（鹿児島市 中村勝太郎氏蔵）

(4) 茶壺（その4）

壺のつくりは薄手ではなはだ軽い。ヘラで仕上げたような跡がみえる。耳は四つ。耳には鉛筆の通るくらいの穴があけてある。色は黒かっ色で肩のところまで上薬が

つよい。はだ色がみごと の印がはいっている。いんべ焼きではなかろうかと言われる。

(5) 茶壺(その5)

壺のつくりは薄手ではなはだ軽い。ロクロをもちいた形跡はなく、ヘラで仕上げた跡と、刷毛目の跡が明らかである。肩の張りは大きく腰は思い切りほそくしぼってあり、ようやく立っているほどである。胴の上半分は濃い青らん色の上葉がつよい。上葉は壺の内側にまでかかっている。この壺は串木野市の旧家奥田家から譲り受けたもので、ルソン壺と伝えられる。

写真45 茶壺(その5)

高さ 59.1 cm

(鹿児島県伊集院町 伊藤政信氏蔵)

写真46 茶壺(その6)

高さ 49.1 cm

(鹿児島県谷山市 川上矢吉氏蔵)

(6) 茶壺(その6)

つくりは薄手で軽い。形はややいびつにできていて、手離しでは立たない。耳は四つ。色は緑黄かっ色、胴の上半は上葉がつよくかかっている。斜めからみるとにじ色に光る。深味のある色合い。父の代までは茶壺としてもちいられていたという。

(7) 茶壺(その7)

つくりは薄手ではなはだ軽い。耳は四つ。姿がまことに上品で落ち付きがある。地色は茶かっ色、肩から上は上葉が強くかけられ、べつ甲色。かなり古いものらしく、ところどころ上葉のはげ落ちたあとが見える。

写真47 茶壺(その7)

高さ 45.2 cm

(鹿児島県伊集院町 梅之家蔵)

(8) 茶壺(その8)

大型茶壺である。色は灰かっ色。耳は四つ。山之内才次氏の父は鹿児島の伊集院家に仕えた人、その関係で、当時鹿児島から持ち帰ったものではなかろうかと言われている。姿や口づくりなどからして“ナンバン焼き”ではなかろうかと言われている。

写真48 茶壺(その8)

高さ 73.9 cm

(鹿児島県川内市 山之内才次氏蔵)

(9) 小出し茶壺

(a) 小出し茶壺(竜門司焼き)

写真49の三つとも、竜門司焼き小出し茶壺、ふくよかな肩の張り、なんともいえない趣のある姿をしている。中央と右の2個には、芳平の銘がはいっている。

写真49 小出し茶壺(竜門司焼き)
高さ左から 9 cm, 11.5 cm, 13.9 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

(b) かぶせぶた小出し茶壺

かぶせぶたの茶壺ははなはだ珍しいという。ふたの形からすると、時代はかなり古いらしく、あるいは苗代川以前の、串木野焼きではなかろうかとも言われる。はだ色は竜門司焼きに似ているところが、むしろ苗代川焼きに近いという(写真50参照)。

写真50 かぶせぶた小出し茶壺
高さ 17.5 cm
(鹿児島市 美術館陳列)

(c) のせぶた小出し茶壺

なに焼きかわからないが、時代のものであることには間違いないと言う。のせぶたの茶壺は、かぶせぶた茶壺と

写真51 のせぶた小出し茶壺

ともにはなはだ珍しい壺とせられている(写真51参照)。

6.6 おわりに

茶に関して古くから薩摩に伝わる物件には茶碗、茶壺をはじめ、さまざまな茶器の類があげられる。ここに掲げたものは、いずれも島津藩政時代の作であり、しかも家宝として、あるいは重要な文化財として、その一つ一つが、掛け替えのない代表的な品ばかりである。紙面の都合で、今回は紹介できなかった資料も、まだ手許にかなり残されている。これらのほかに、わたくしの知らない品も、おそらく数多く各地に保存されていることであろう。

これら茶器の類が、島津藩政時代の茶の歴史と、どのような関係におかれてきたかは、即断をしかねるところであるが、それにしても、これらの物件からして歴代藩主が茶事にきわめて関心が深かったということはいうことができる。

ともかく、このように茶に関係する文化的遺産が、いつの間にか、しらすらすのうちに、逸散することのないようにしたいものである。

今次太平洋戦争による戦災は、文化財の多くを灰じんに帰したことであろう。阿久根の小木原三楽は文政の昔、藩主斉宣公のちょう愛をうけ、かつ、茶業に尽くした功績により、藩公から茶器その他をしばしば拝領せられた由が史実に残っているが、戦災をこむり、今はその何物も残されていないという。まことに惜しいことである。これらはほんの一例にすぎないのである。

このようなことからして、名器は名器として、たいせつに保存すべきは申すまでもないが、万が一ということをも考えるならば、なんらかの形で記録として後世に残しておくことも、あながちむだとは思われない。

この調査に当たって、貴重な資料を快く御提示下された多くの方々に対しては、心から厚くお礼を申し上げたい。なお島津家からは資料の公表に対して、格別の便宜をいただいた。中尾健次氏および沈寿官氏御夫妻からは、資料の提示とともに、多くの助言をいただいた。鹿

児島市美術館長谷口千二氏からは、始終懇切な指導と多大の助言をいただいた。仮屋園健次氏は家業のかたわら、資料の収集に奔走して下さった。これらの諸氏に対しては、深く感謝の意を表するしだいである。

7 参 考 文 献

- 61) 日置郡茶業組合：日置郡茶業誌，p. 32～35(1939)。
- 62) 鹿児島県社会科研究会高等学校歴史部会：鹿児島
の歴史，p. 75～76 (1959)。
- 63) 加治木古老物語（写本），51枚目の裏。
- 64) 鹿児島県社会科研究会高等学校歴史部会：鹿児島

の歴史 p. 76～77 (1959)。

- 65) 鹿児島県社会科研究会高等学校歴史部会：鹿児島
の歴史 p. 77 (1959)。
- 66) 鹿児島県社会科研究会高等学校歴史部会：鹿児島
の歴史 p. 65 (1959)。
- 67) 鹿児島県社会科研究会高等学校歴史部会：鹿児島
の歴史 p. 76 (1959)。
- 68) 照国神社社務所：物件を通じて見たる斉彬公，
p. 42 (1933)。
- 69) 茶業組合中央会議所：日本茶業史，p. 526 (1915)。
- 70) 文芸春秋新社：オール読物，p. 145～164 (1957)。

(Apr. 28, 1961)